

平成 28 年度 介護のしごと理解促進事業 自由意見の総括

アンケートの自由意見を総括すると下記のような内容であった。

多かった感想としては「すごいと思った」「人の役に立つ仕事だと負った」「興味がわいた」「介護のイメージが良くなった」「将来介護の仕事をしたと思った」「介護の仕事ができる人は優しい」「貴重な体験ができた」「大変な仕事だけど、やりがいのある仕事だと思った」「楽しい仕事だと思った」「介護で働く人を増やさないといけないと思った」「人に感謝される仕事だと思った」「あのような仕事ができる人を尊敬する」「介護の仕事がんばってほしい」「大変な仕事なのに笑って仕事をしていて楽しそうに仕事をしているように見えた」等、そのほとんどがポジティブな感想であった。特に「大変そうだけど楽しそう」や「介護のイメージが良くなった」、「介護の仕事はやりがいのある仕事だと思った」は非常に多かった。イメージアップDVDの映像を見て、そのような楽しさややりがいは十分に伝わっているようであった。学生は給与や労働条件等の現実的な部分ではなく、仕事の楽しさややりがい、社会への貢献度などを重視する傾向にあるようであった。

ネガティブな感想はほとんどなかったものの、「大変な仕事だと思う」「とても忙しい仕事だと思う」「介護のしごとはきついと聞いている」という文言が含まれている感想が非常に多かった。これについて考えると、このようなネガティブなイメージの多くはニュース等のマスメディア、または周囲の大人から得た情報によるものであることが推測される。つまり学生は介護のしごとを実体験できないため、そのイメージ形成は外部の情報に依存するということである。

アンケートの感想全体から推測すると、今回の中学生の多くが介護のしごとは詳しく知らない、興味がなかった、また知ってはいるがイメージが悪かったようである。しかし事業の中でイメージアップDVDを見る、実際に介護職員と話す、介護業務を体験する事を通して、無かったイメージやネガティブなイメージがポジティブなイメージへと変化していったようだ。学生にとっては、仕事は生活するためのものというような現実的な概念ではまだなく、仕事は楽しくやりたい、人のためにやりたい、やりがいを持ちたいというような理想的な概念であるようで、今回の事業のように、学生が持っている感性に訴えかける働きは非常に有効であると思われる。学生の中の、実体験でない、外部からもたらされるネガティブイメージを払拭し、ポジティブイメージを保っておくためには、低学年から定期的に、今回の事業のような介護のしごとの良い部分にフォーカスして広める活動が非常に重要であり、ひいては今後の介護職員の充足率を左右する可能性があると思われる。